

# 通玄寺（穂積町）・水月院（岐阜市）の仏像

清水眞澄・川瀬善忠

## A Study of Buddhist Images Preserved in Tsugenji, Hozumicho and in Suigetsuin, Gifu city.

Mazumi SIMIZU・Zenchu KAWASE

### 1. はじめに

本巣郡穂積町通玄寺と岐阜市奥水月院の仏像を平成3年に調査する機を得たので、その結果について以下報告する。

#### (1) 通玄寺木造如来坐像（本巣郡穂積町本田）

通玄寺には本尊の木造聖観音菩薩立像（江戸時代前半の作）や木造宇賀福神立像（江戸時代の作）など10体ほどの仏像が安置されているが、この像は家人が平成2年の年末大掃除の時、本堂の開山堂下のリンゴ箱の中から、偶然発見した像である。

〔法量〕 単位cm

像高	20.8	面長	4.6	頭頂～顎	7.1	面幅	4.9	耳張	5.3
面奥	5.5	肘張	14.4	胸厚	6.8	腹厚	8.4	膝張	16.9
膝高（右）	3.5	（左）	3.4	膝奥	11.3				

〔構造・形状・時代等〕

頭に螺髪を刻み、衲衣をまとい、右手を上げて、左手を膝上におき、左足を上にして結跏趺坐する如来坐像である。両手先を欠失しているので、尊名は確定できないが、寺伝にある薬師如来像の可能性も考えられる。

寄木造り、玉眼、膝箔（現状はほとんど下地の黒漆塗り）。木寄せは頭体を三道下で割首とし、頭は左耳前から右耳後ろに斜めの前後に割矧ぎ、体は両袖も含めて前後割矧ぎとし、さらに背板として別材を寄せる。また脚材を寄せている。現状では、両手先、裳先を欠失し、臉上などに多少の損傷がある。

面相は顎、頬が豊かであり、肉髻は低く、髪際ゆるいカーブをつくる。体もどっしりとした量感を具え、衲衣の襷にも変化があって南北朝時代の特徴が見られる。

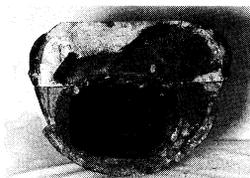


写真51 木造如来坐像の底部



写真52 通玄寺で見つかった木造如来坐像



写真53 通玄寺木造如来坐像 側面 写真54 通玄寺木造如来坐像 側面 写真55 通玄寺木造如来坐像 背面  
 ※この木造如来坐像は、調査後解体修理がなされ、現在では薬師如来坐像として通玄寺本堂に安置されている。

## (2) 水月院 木造十一面観音立像 (岐阜市奥74)

〔法量〕

像高 104.8 面長11.7 頭頂～顎 27.5 面幅 11.0 耳張 13.4  
 面奥 13.5 肘張 31.0 裾張 24.0 胸厚 14.5 腹厚 15.8

〔構造・形状・時代等〕

この十一面観音立像は、頭上に十一の面を置き、左手に蓮華をとり、右手を下ろして立つ通例の十一面観音立像の形姿をとっている。上半身に条帛、下半身に裳を着け、さらに肩から天衣を垂らし、装身具として宝冠、胸飾り、腕釧、肘釧を付けているものも一般的な菩薩の姿である。天冠台から下の髪は筋彫りとし、そこから両耳に一条わたし、眉間には白毫を表している。

構造は一木造りで内刳は施していないようであり、眼は彫眼とし、像の表面は褐色の漆塗りである。白毫は水晶。宝冠、胸飾りは銅製鍍金。像は頭体を一木から造り両腕を肩、肘、手首で、また両足は足先をそれぞれ削ぎつけている。なお面部のみ耳前で割刳いでいるのは、かつて玉眼を嵌めていた可能性が考えられる。天衣は別材。白毫、宝冠、胸飾り、持蓮華、表面の漆塗りは後補である。

面相は整って、穏やかな表情をつくっており、体に着けた条帛や裳の衣文などの表現も巧みで、古様を踏襲した上手の作といえる。製作年代は面相や体の質感、衣文の表し方、技法などからみて室町時代末～江戸時代初（桃山時代）と考えられる。

※通玄寺木造如来坐像の写真は明珍昭二氏に提供いただいた。



写真56 木造観音立像部分

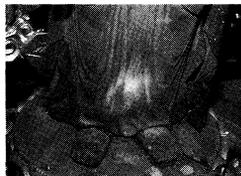


写真57 木造観音立像部分



写真58 木造観音立像